

学校統廃合における学校施設の複合化と廃校舎活用

四方 利明

(立命館大学)

はじめに

近年学校統廃合が全国で進行している。文部科学省の学校基本調査によれば、2018年度の小学校数は19,892校と、ついに20,000校を割ることとなった。1980年代半ばには約25,000校あったものが、この30年で約5,000校、おおよそ5校に1校もの小学校が閉校となったのである。

学校統廃合を学校建築という観点から見たときには、統合校の校舎をどうするか、そして閉校後の廃校舎をどうするかという二つの問題が存在する。前者については、新しい土地を造成して建てるのか、閉校となった学校の敷地に建てるのかという敷地の問題があるし、既存の校舎を使用するケースもあれば、まったく新しい校舎を建てる場合もある。また、後者については、取り壊すのか別用途で活用するのか、あるいは校舎の一部のみ残して活用するのか、といった選択肢がありうる。

ところで、学校が担う最も重要な役割は、子どもたちを教育することであることはいままでもない。しかし、それだけではなく、災害発生時には避難所として、選挙時には投票所として校舎が使われることを想起すれば明らかのように、地域の拠点としての役割をも担っている。それゆえ、学校統廃合による閉校という事態は、子どもたちの教育に対する影響に加え、地域に対しても拠点である学校

そのものが消滅するという大きな影響を及ぼすことになり、地域と学校とのかかわりはいかなる形で代替させ継承していくのかという課題が浮かび上がってくることになる。

こうした課題に対する学校建築的な応答の試みが、学校施設の複合化や廃校舎の活用であろう。統合校の校舎に、地域住民が利用する他の公共施設を併設することは、学校と地域とのかかわりを統合校において維持しようとする試みであるにとらえることができよう。また、廃校舎を活用することは、校舎が閉校によって子どもたちへの教育的な機能を喪失しても、地域の拠点としての機能は維持し続けようとする試みとしてとらえることができるだろう。

以下、学校統廃合による統合校の校舎における学校施設の複合化と、廃校舎を学校教育とは別用途で活用する廃校舎活用について、順にみていくことにしたい。

1. 統合校における学校施設の複合化

(1) 学校施設の複合化

学校施設の複合化とは、校舎を、学校単体で建てるのではなく、他の施設を併設することである。学校に併設される施設は、図書館、公民館、保育園、幼稚園、高齢者福祉施設といった公共施設がほとんどであるが、たとえば京都市立京都御池中学校の場合、中

学校に高齢者福祉施設と保育園が併設されているほか（竣工当初は市役所のオフィスも併設されていた）、御池通りに面した校舎の1階部分に「賑わい施設」が設けられ、ベーカリーカフェ・イタリアンレストラン・雑貨屋の3店舗が入っている。

学校施設の複合化は、1980年代以降の学校建築のトレンドである。文部（科学）省も、1991年に「学校施設の複合化について」の通知を出し、その後も調査研究協力者会議を設置して、『複合化及び高層化に伴う学校施設の計画・設計上の配慮について』（1997年）、『高齢者との連携を進める学校施設の整備について』（1999年）、『学習環境の向上に資する学校施設の複合化の在り方について』（2015年）といった報告書を公表するなど、学校施設の複合化を推進してきた。

これらの報告書によれば、学校施設の複合化においては、併設された施設相互の交流を通して、少子高齢化社会、生涯学習社会に対応した「学校と地域社会の連携」が目指されている。また、「子供たちに多様な学習機会を創出するとともに、地域コミュニティの強化、ひいては地域の振興・再生に寄与すること」が期待されている。では、学校統廃合による統合校の校舎が複合施設として新築された場合、このような目的は実現しているであろうか。

(2) 都心部的場合

東京都千代田区では、それまで14校あった小学校を8校とする学校統廃合が1993年に行われた。千代田区のコミュニティスクール構想に基づき、統合校の校舎が次々に複合施設として建設されている。

千代田区立千代田小学校の校舎は、1998年に竣工した地上7階地下2階の複合施設である。建物西側に、左（北）側から順に、マミーズエンジェル千代田保育園、千代田小学校・千代田幼稚園、教育研究所・子ども発達

支援センターさくらキッズ・児童家庭支援センターの入口が3箇所別々に設けられ、これらの入口とは建物の反対側に、神田まちかど図書館の入口がある。6階にあるさくらキッズ・児童家庭支援センター、7階にある教育研究所へは、1階入口からエレベーターで直行する。



千代田区立千代田小学校（筆者撮影。以下の写真も同じ）

千代田区立昌平小学校の校舎も、1996年に竣工した地上6階地下2階の複合施設である。1、2階吹き抜けの玄関ホールに立つと、地面には4本のラインが引いてあり、左から順に、昌平まちかど図書館、昌平小学校、昌平幼稚園、神田児童館・小学館アカデミー昌平保育園の入口につながっており、ラインにしたがって歩いて行けば目的の施設へ迷わずたどりつけるようにしてある。5階にある神田児童館へは1階からエレベーターで直行する。



千代田区立昌平小学校

このように、千代田区立の2つの小学校の複合施設校舎ともに、併設された複数の施設の入口は別々に設けられており、それぞれの施設の利用者どうしの動線は基本的にクロスしない。また、千代田小学校には神田まちか

ど図書館、昌平小学校には昌平まちかど図書館と、両校ともに千代田区立千代田図書館の分館が併設されている。両校の学校図書室はまちかど図書館と同一空間を共用しているが、学校図書室の一角はまちかど図書館スペースからロープパーテーションや柵によって明確に区分けされている。まちかど図書館は、ビジネスパーソンや地域住民の利用が多く、両校の教員ともに、子どもたちがまちかど図書館の利用者に迷惑をかけないか絶えず気を使っているようである。

(3) 中山間地域の場合

こうした事情は、他の複合施設でも同様である。京都府南山城村では、それまで4校あった小学校を1校とする統廃合が行われた。統合校である相楽東部広域連立南山城小学校の校舎は、新たな土地を造成し、建設費に村の一年分の予算額をも凌駕する約23億円をかけて、開校にあわせて2003年に竣工した。リチャード・ロジャースが設計し、屋根が波状に並び原色数色を組み合わせたカラフルでインパクトのある外観が印象的であるが、同一敷地内に南山城保育園、南山城村保健福祉センターが併設されている（2009年度に南山城村・和束町・笠置町の3町村による相楽東部広域連立教育委員会が発足したことにより、南山城村立南山城小学校から名称変更した）。



相楽東部広域連立南山城小学校

子どもたちは、小学校へと続く133段もの長い階段をのぼり、右に保健福祉センター、保育園を順にみながら登校する。他の施設を

みながらの登校は複合施設の目的に適うようにも思われるが、階段側から両施設へ入ることはできなくなっており、両施設の入口は建物を挟んだ反対側に設けられている。このように、南山城小学校と併設された施設においても、利用者どうしの動線はクロスしないようになっている。

ただ、利用者どうしまったく接点がないというわけではない。小学校の総合的な学習の時間においては、子どもたちは保健福祉センターの利用者と交流する機会があるとのことで、複合施設ならではの「多様な学習機会」が子どもたちに与えられているといえよう。

(4) 複合施設と社会、地域

それでも、子どもたちと併設施設の利用者がいつでも自由に交流できるようにはなっていない。その背景としては、2001年の大阪教育大学附属池田小学校事件以降、全国の学校にセキュリティ対策を求める社会的要請が高まったことが大きいだろう。しかも、昨今の学校にはアカウントビリティが求められているので、各学校や教育委員会は、安全管理に万全の対策を講じていることを、保護者や地域住民などに対して明示する必要に迫られている。

このようにみえてくると、統合校を複合施設とすることで、併設された施設との交流を通じた「学校と地域社会の連携」を実現することはなかなか難しい点もあるように思う。とりわけ南山城小学校は、閉校となった4つの小学校がいずれも5～10kmほど離れたところに位置しており、閉校となった小学校の校舎を地域の拠点としてさまざまな場面で気軽に利用してきた地域住民にとっては、統合後の南山城小学校は、地理的にも心理的にも距離が遠くなってしまったようである。

一方で、閉校となった小学校のうちの1校の跡地に建てられた千代田小学校、昌平小学校ともに、放課後は学校図書室も含めて校舎

を地域開放している。両校とも、地下1、2階吹き抜けのスポーツクラブかともまがうジャクジー付きの立派なプールがあり、また、千代田小学校は2階部分に校庭、昌平小学校は全天候型の屋上校庭がある。プール、校庭ともに、地域住民や近隣に勤務するビジネスパーソンの利用で賑わっているとのことで、「地域の振興」を目指した複合施設の魅力を発揮しているともいえる。

都心部の千代田区に位置しているか、中山間地域である南山城村に位置しているかの違いもあるだろう。学校施設の複合化は、それだけを取り出して是非を判断するのはなかなか難しく、教育的な観点に加えて、学校を取り巻く地域の事情等、さまざまな観点から考える必要があるといえよう。

2. 廃校舎活用

(1) 毎年500校もの閉校

冒頭で述べたように、小学校だけでも、この30年ほどで5,000校もの小学校が閉校となった。文部科学省の「廃校施設活用状況実態調査」(2016年5月1日現在)によると、2002年度から2015年度までの中学校や高等学校なども含めた閉校数は6,811校であり、毎年500校ほどの学校が閉校となっている。閉校にともなって発生する廃校舎をどのように活用するかは、これまで学校をコミュニティセンターと位置づけてきた地域にとっては喫緊の課題である。廃校舎の活用は、校舎がメインに有してきた子どもたちへの教育的な機能を喪失したとしても、校舎と人々とのかわりを継続することで、地域の拠点としての機能を維持しようとする試みであるといえることができるだろう。

(2) よみがえる廃校舎

先にみた南山城小学校に統合され、2002年度をもって閉校となった旧南山城村立田山小学校の廃校舎は、1936年築の平屋の木造校

舎であり現存している。瓦屋根で板張りという外観であり、校舎のなかに入ると、北側片廊下型のオーソドックスな造りで、木材をふんだんに用いて建てられた校舎には独特の気品がある。当時の大工が丁寧な仕事をし、その後もこの校舎が大切に使われてきたであろうことをうかがい知ることができる。実際、田山地区に伝承された田山花踊りの際に、講堂が準備会場、運動場が前半部の舞台となるなど、子どもたちや教員のみならず、地域住民によってもこの校舎は大事に使われてきたようである。それだけに、廃校舎をどうするかは、地域にとっての懸案事項であった。

そのような折り、村外在住者が旧職員室を使って木工工房を始めたのが2006年、次いで田山地区に住む田山小学校卒業生も旧教室においてわら細工を始め、さらにガラス工房やペーパークラフト工房、そば教室、カフェ等が次々に始まることとなり、廃校舎は田山地区内外の人々が同居する、モノ作り体験施設「はどる」として生まれ変わることとなった。木工工房では排気設備をつける以外に特に目立った改修はされておらず、また水道の設備があり大きな机が備わっている理科室がそのままそば教室として使われている。



はどる

福岡県朝倉市の山あいにある美術館「共星の里」は、1994年度をもって閉校となった旧甘木市立黒川小学校の廃校舎を活用し、2000年に開館した美術館である。運動場の奥に鉄筋コンクリート造の2階建て校舎が建っており、外観をみる限り何の変哲もない日本の典

型的な校舎のたたずまいである。



共星の里

しかし、2008年にここを初めて訪れたとき、玄関に入って右側の廊下をみると、廊下であるはずの空間に大きな犬の首が鎮座していた。これは吉野辰海の「大首1989」という作品であり、「大首」のさらに奥にも現代アートの作品群が廊下の突き当たりまで所狭しと並んでいた。教室を南側に直列させその北側を片廊下でつなぐという、日本の典型的な校舎の造りそのものは、美術館として再生された現在も何も変わっていない。にもかかわらず、そこに現代アートが鎮座することによって、自明のはずの風景が自明でなくなることに強い衝撃を受けた。



共星の里 1階廊下(2008年訪問時。手前の作品は、吉野辰海「大首 1989」)

現在、「大首」は相変わらず妖しいオーラを放ちながら2階の廊下に引っ越しているが、その2階の廊下を進むと瓦屋根で木造平屋の旧講堂に至る。旧講堂の造りもそのまま、テーブルやイス、アート作品等が配置されることによって、現在はレストランに生まれ変わっている。旧講堂に隣接する旧給食室も、そのままレストランの厨房として使用されている。

旧黒川小学校の廃校舎を残すことは地域住民の強い意向であり、地域の行事が行われるなど、校舎と地域住民とのかかわりは継続している。共星の里というネーミングには、アーティストと地元が共に輝くという願いが込められているようで、こうした願い通りに、地域の内外や世代を超えてさまざまな人々が訪れ、ここでゆっくりした時間を過ごしている。

(3) 廃校舎活用の可能性

廃校舎活用に共通していることは、元々の校舎の造りがそのまま活かされて活用されているということである。それでいて、学校として使われていたときよりも、校舎と人々とのかかわりが自由でクリエイティブであり、教育的な機能に隠れて見えなかった校舎の持っているさまざまな可能性が引き出されているように思う。そして、これまで校舎が有してきた地域の拠点としての機能を維持しており、廃校舎の活用においては、校舎に地域住民がかかわる余地が残されていることが重要であるといえよう。

むすびにかえて

以上、学校統廃合の統合校の校舎における学校施設の複合化と、学校統廃合によって閉校となった廃校舎の活用についてみてきた。あらためて気づくことは、学校は、子どもたちに対する教育機関でありつつ、地域の拠点としての役割をも担っており、校舎には、子どもたちや教員のみならず、地域住民をはじめとするさまざまな人々がかかわっているということである。そして、校舎のありようは、校舎が竣工した時点で固定されるのではなく、校舎と人々とのかかわりや、地域や社会のありように大きく左右されるということである。学校統廃合の問題を考える際には、子どもたちに対する教育的な観点に加え、学校の有する多様な側面に配慮する必要があるといえるだろう。